

詩篇106篇

I. 賛美への招き

- 1 ハレルヤ。主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。
- 2 だれが主の大能のわざを語り、そのすべての誉れをふれ知らせることができよう。
- 3 幸いなことよ。さばきを守り、正義を常に行う人々は。
- 4 主よ。あなたが御民を愛されるとき、私を心に留め、あなたの御救いのおかげ、私を顧みてください。
- 5 そうすれば、私はあなたに選ばれた者たちのしあわせを見、あなたの国民の喜びを喜びとし、あなたのものである民とともに、誇る事ができるでしょう。

II. 罪の記録

《民族的罪の告白》

- 6 私たちは先祖と同じように罪を犯し、不義をなし、悪を行った。

《①紅海での反逆》

- 7 私たちの先祖はエジプトにおいて、あなたの奇しいわざを悟らず、あなたの豊かな恵みを思い出さず、かえって、海のほとり、葦の海で、逆らった。
- 8 しかし主は、御名のために彼らを救われた。それは、ご自分の力を知らせるためだった。
- 9 主が葦の海を叱ると、海は干上がった。主は、彼らを行かせた。深みの底を。さながら荒野に行くように。
- 10 主は、憎む者の手から彼らを救い、敵の手から彼らを贖われた。
- 11 水は彼らの仇をおおい、そのひとりさえも残らなかった。
- 12 そこで、彼らはみことばを信じ、主への賛美を歌った。

《②荒野での反逆》

- 13 しかし、彼らはすぐに、みわざを忘れ、そのさとしを待ち望まなかった。
- 14 彼らは、荒野で激しい欲望にかられ、荒れ地で神を試みた。
- 15 そこで、主は彼らにその願うところを与え、また彼らに病を送ってやせ衰えさせた。
- 16 彼らが宿営でモーセをねたみ、主の聖徒、アロンをねたんだとき、
- 17 地は開き、ダタンをのみこみ、アビラムの仲間を包んでしまった。
- 18 その仲間の間で火が燃え上がり、炎が悪者どもを焼き尽くした。

《③偶像礼拝》

- 19 彼らはホレブで子牛を造り、鑄物の像を拝んだ。
- 20 こうして彼らは彼らの栄光を、草を食らう雄牛の像に取り替えた。
- 21 彼らは自分たちの救い主である神を忘れた。エジプトで大いなることをなされた方を。
- 22 ハムの地では奇しいわざを、葦の海のほとりでは恐ろしいわざを、行われた方を。
- 23 それゆえ、神は、「彼らを滅ぼす」と言われた。もし、神に選ばれた人モーセが、滅ぼそうとする激しい憤りを避けるために、御前の破れに立たなかったなら、どうなっていたことか。

《④約束の地からの後退》

24 しかも彼らは美しい地をさげすみ、神のみことばを信ぜず、
 25 自分たちの天幕でつぶやき、主の御声を聞かなかった。
 26 それゆえ、主は彼らにこう誓われた。彼らを荒野で打ち倒し、
 27 その子孫を国々の中に投げ散らし、彼らをもろもろの地にまき散らそうと。

《⑤シティムでの異教との交わり》

28 彼らはまた、バアル・ペオルにつき従い、死者へのいけにえを食べた。
 29 こうして、その行いによって御怒りを引き起こし、彼らの間に神罰が下った。
 30 そのとき、ピネハスが立ち、なかだちのわざをしたので、その神罰はやんだ。
 31 このことは、代々永遠に、彼の義と認められた。

《⑥メリバの水》

32 彼らはさらにメリバの水のほとりで主を怒らせた。それで、モーセは彼らのためにわざわいをこうむった。
 33 彼らが主の心に逆らったとき、彼が軽率なことを口にしたからである。

《⑦カナン宗教の受容》

34 彼らは、主が命じたのに、国々の民を滅ぼさず、
 35 かえって、異邦の民と交わり、そのならわしにならい、
 36 その偶像に仕えた。それが彼らに、わなであった。
 37 彼らは自分たちの息子、娘を悪霊のいけにえとしてささげ、
 38 罪のない血を流した。カナンの偶像のいけにえにした彼らの息子、娘の血。こうしてその国土は血で汚された。
 39 このように彼らは、その行いによっておのれを汚し、その行いによって姦淫を犯した。

《⑧捕囚と赦し》

40 それゆえ、主の怒りは御民に向かって燃え上がり、ご自分のものである民を忌みきらわれた。
 41 それで彼らを国々の手に渡し、彼らを憎む者たちが彼らを支配した。
 42 敵どもは彼らをしいたげ、その力のもとに彼らは征服された。
 43 主は幾たびとなく彼らを救い出されたが、彼らは相計って、逆らい、自分たちの不義の中におぼれた。
 44 それでも彼らの叫びを聞かれたとき、主は彼らの苦しみに目を留められた。
 45 主は、彼らのために、ご自分の契約を思い起こし、豊かな恵みゆえに、彼らをあわれまれました。
 46 また、彼らを、捕らえ移したすべての者たちから、彼らがあわれまれるようにされた。

Ⅲ. 祈りと賛美

47 私たちの神、主よ。私たちをお救いください。国々から私たちを集めてください。あなたの聖なる御名に感謝し、あなたの誉れを勝ち誇るために。
 48 ほむべきかな。イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。すべての民が、「アーメン」と言え。ハレルヤ。

詩篇第四巻も最終篇となりました。本篇は48節までである「中篇」ではありますが、その大半はイスラエルの反逆の歴史を綴っています。構造としては以下のようになります。

- I. 賛美への招き（1～5節）
- II. 罪の記録（6～46節）
- III. 祈りと賛美（47～48節）

つまり、二つの賛美に挟まれる形でイスラエルの黒歴史が回顧されているのです。また、本篇は105篇とのつながりが強く、コインの表と裏のような関係にあります（107篇を含めて三部作という見方もあります）。105篇はイスラエル史に現れた神の守りと導きの数々に焦点が当てられていましたが、106篇ではイスラエルの失敗の歴史が炙り出されています。結論めいてしまえば、これは人の人生とも似ています。もし私たちが「個人誌」なるものをしたとすれば、どのような内容になるのでしょうか。それが半永久的に残る文書であるならば、できれば自分の人生の明るい側面ばかりを綴りたいのではないかと。墓にまで持っていきたい恥ずべき記録は、できれば抹消してしまいたいと思います。しかしながら、この詩人は我が民族の恥部を晒し、更に「**私たちは先祖と同じように罪を犯し、不義をなし、悪を行った**」（6節）と言うことで、自分自身をもその歴史を形成している一人に数えているのです。まず、この詩人の内省的洞察から学ばされます。考えてみますと、聖書中に登場する数多の信仰の先人たちは皆、民の罪を他人事とはせず、自分の罪として主の御前に告白していたことが思い出されます。モーセも、ヨブも、イザヤも、エレミヤも、パウロも、同じ姿勢で祭司として民を代表しました。人の罪を責めることは簡単ですが、人をとりなす者となる尊さを、改めて覚えさせられます。

I. 賛美への招き（1～5節）

1節は「ハレルヤ」で始まっています。これから明らかにされる負の歴史も、すべてが主の恵みの下に置かれているという信仰ゆえに、このように叫ぶことができるのでしょうか。「いつくしみ」「恵み」は、人の罪を覆い尽くす神の愛の別称であり、ここに私たちのすべてがかかっているとも言えます。「**あなたが御民を愛される時**」（4節）、「**あなたのものである民**」（5節）と、何度も確認するかのように、神がご自分の民を捨てることはないという約束を思い出していただくようとしています。そして、その民の一人に自分が含まれていることを書くのを忘れません。「**私を心に留め**」「**私を顧み**」（4節）と。

II. 罪の記録（6～46節）

7節以下では、旧約イスラエルの罪が8つの出来事でまとめられています。

① 紅海での反逆（7～12節）

エジプトでの奴隷生活から解放された民が紅海を渡ろうとしているとき、迫り来るエジプトの戦車隊を見て恐れ、民はモーセに「**エジプトに仕えるほうがこの荒野で死ぬよりも私たちには良かった**」（出14:12）と言って逆らいました。以下、このようなやり取りがしつこく繰り返されます。しかし重要なことは、民の不信仰が現れるとき、尚も彼らを憐れみ給う主の恵みが加えられていくことです。「**しかし主は、御名のために彼らを救われた…**」（8節）。

② 荒野での反逆（13～18節）

ここでは、民が「肉が食べたい」と主張し、主が与えてくださっていた日毎のマナを蔑んだ出来事（民数11:4-6）が「**荒野で激しい欲望にかられ、荒れ地で神を試みた**」とされています。また、コラ、ダタン、アピラム、オンらが共謀して、モーセとアロンを民の指導的立場から引き下ろそうとした事件（民数16章）も綴られています。

③ 偶像礼拝（19～23節）

金の子牛の登場。モーセが山で主より律法を受けているとき、何と民は、モーセの帰りが遅いからと言って、アロンを説き伏せ、鋳物の像を作って拝んでいたというのです（出32章）。この罪に対する審きによって、多くの民が死にました。しかし、このときもモーセのとりなしによって赦しを与えられました。

④ 約束の地からの後退（24～27節）

ここでは、約束の地を前にして、地の偵察に行った者たちが恐れ、その地のネガティブな情報を民に吹聴したことで、民の心が挫けてしまった出来事（民数13:28-33）が記録されています。会衆というものは、大多数の賛成意見よりも少数の反対意見の方が強い影響力を持つてしまう傾向があります。約束の地は目前であったというのに、民はそこから40年の放浪を始めることになるのです。

⑤ シティムでの異教との交わり（28～31節）

民数記25章には、シティムでの滞在中に民がモアブの神々を拝んだという深刻な事態が綴られています。「**こうしてイスラエルは、バアル・ペオルを慕うようになった**」（民数25:3）。イスラエルの民は、どうしてこうも一人の神を愛することができないのでしょうか。民を贖った方を繰り返さないがしろにしてしまうのはなぜなのか。しかし、この時にもピネハスが立ち上がり、神の怒りを鎮めました（民数25:7-8）。

⑥ メリバの水（32～33節）

ツィンの荒野で水が得られなかったとき、民は再びモーセとアロンを責め立てました。そのとき、堪忍袋の尾が切れたモーセは、主の指示以上のことをして岩を二度叩き、御心を損なってしまいました（民数20:1-13）。モーセの罪がどこにあったのかは不明瞭ですが、彼もまた民と共に約束の地に入るができなくなってしまったのです。

⑦ カナン宗教の受容（34～39節）

主の憐みによって、ヨシュアに率いられた次の世代がカナンの地に入ることが許されましたが、そこでもやはり不従順が繰り返されます。民はカナンの先住民と戦っていきませんが、主の指示に従いきることができず、結果として先住民と混じり合うことになっていきます。その経緯は士師記の冒頭に述べられています。「**エブス人を追い払わなかった**」（1:21）、「**…村落は占領しなかった**」（1:27）、「**カナン人を追い払わなかった**」（1:29）。主が懸念されたのは、民が先住民の宗教を受け入れていくことでしたが、果たしてそのようになりました。

⑧ 捕囚と赦し（40～46節）

時代は飛び、北イスラエルと南ユダの分裂王国時代を経て、両王国がアッシリアとバビロニアに滅ぼされ捕囚となった出来事が「審き」として描かれています。もはや「神の民」存亡の危機でありましたが、主はいつの時代にも「残りの者（remnant）」を立て、次の時代の担い手とされます。この捕囚の時代にも憐れみは尽きませんでした。「それでも彼らの叫びを聞かれたとき、主は彼らの苦しみに目を留められた。主は、彼らのために、ご自分の契約を思い起こし、豊かな恵みゆえに、彼らをあわれまれました。」（44-55節）

Ⅲ. 祈りと賛美（47～48節）

以上の内容から、本篇は捕囚帰還内または捕囚後に書かれたものである可能性が高いことが分かります。詩人が懸念しているのは、帰還民が再び出エジプトを経験した民がやったと同じ反逆を繰り返すのではないかということでしょう。人間の性質とはそうなのだ。神を怒らせないでいられた時代は一つもなかった。それなら、自分といっしょにいる民は…。詩人は繰り返される歴史に絶望を抱きながら、尚も神の恵みがそれ以上であることを信じ、祈りと賛美をささげます。「私たちの神、主よ。私たちをお救いください。国々から私たちを集めてください。あなたの聖なる御名に感謝し、あなたの誉れを勝ち誇るために。ほむべきかな。イスラエルの神、主。とこしえから、とこしえまで。すべての民が、「アーメン」と言え。ハレルヤ。」

詩人は、自分が過去のイスラエル史における民と同じように失敗を繰り返す人間であることを深く自覚していました。だから、旧約の歴史を他人事として見ることはできなかつたのです。これこそが真の旧約聖書の読み方と言えるでしょう。そこに尚も注がれ続けている神の恵みを見ることができる。そして、このような私たちのために世に来てくださった主イエスを信じる道が拓かれているのです。